

理論を生きる レポート

学期の初めに、この課題を行う対象となるコース内の二つのセクションを選択してもらう。（週末までに選択しなかった学生については、自動的に割り当てられる。）その二つのセクションから、それぞれ特定の倫理理論を一つずつ選ぶこと。この課題では、それら二つの理論に従って、それぞれ丸一日生活してもらう。その後、そのセクションの最後に、自分の経験についてクラスで発表を行う。

「理論を生きる」とは何か

この表現には重要な意味が込められているので、ここではっきりさせておきたい。理論を生きるとは、単にその理論が支持する行為を実行することではない。また、各場面で「理論 X ならどうするか」と自問し、その答えに従うことでもない。そうではなく、その理論の立場の内側から熟慮すること——つまり、その理論にコミットしている人ならどのように考えるかという仕方考え、彼らが重視する考慮事項を自分でも重視し、その理論の支持者が説得力を感じる理由を、自分でも重みあるものとして感じるよう真剣に試みることである。

これは、思っている以上に難しい。理論が本当に判断の働きをしていなければならず、単に自分がもともとしようとしていたことを、後から事後的正当化するためのものになってはならない。一日の終わりに振り返って、どの理論を「生きていた」としても結局すべて同じ決定をしていたはずだと思えるなら、あなたは本当にはその理論を生きていなかったのである。

発表に含めるべき内容

- その日になされた決定のうち、もっともよく選択した理論を体現していると思うものを一つ挙げる。なぜその決定がその理論をもっともよく表していると考える

のか。どのような代替案があり、なぜ理論はそれらではなくこの選択肢を推奨したのか。

- 理論に従って生活してみた経験が、その理論の道徳理論としての妥当性や、その強み・弱みについて何を示したのかを振り返ること。
- その理論を一日生きてみることで、何を学んだのかを説明すること。
-

何が「良い振り返り」なのか

興味深い問いは、その理論を好きになったかどうかではない。興味深いのは、理論を生きることでどのような種類の証拠が得られたのかである。以下のような点に注目するとよい。

- 理論をまったく適用できないと感じた状況はあったか。なぜその状況は理論に抵抗したのか。
- 理論が推奨した行動方針を、よく考えてみると自分では受け入れられないと感じた決定はあったか。それは何を示しているのか。
- その理論は、自分が予想していた以上のことを要求してきたか。それとも、予想より少なかったか。
- 自分が、その理論では正当化されない考慮事項に頼ろうとしていることに気づいた瞬間はあったか。もしあったなら、それは自分自身、あるいは理論について何を示しているのか。
- 理論によって、それまで自分が混乱していた何かが明確になった瞬間はあったか。それは何だったのか。
-

「理論に問題があった」のか、「問題は自分の側にあった」のか

この区別こそが、この課題の核心であり、また振り返りの中で最も難しい部分でもある。

ある理論に従って生きることが難しかったとき、もっとも簡単に出てくる結論は、「その理論はもっともらしくない」というものである。しかし、その結論を出すには正当化が必要である。理論を生きることが難しい理由には、少なくとも次の三つがあり、そのうち理論そのものに不利に働くのは一つだけである。

1. その理論が、本当に不合理な要求をしている。この場合は、正真正銘の哲学的反論となる。ただし、それは単に「不快だった」というだけではなく、その要求が本当に不合理であることを示せた場合に限られる。

3. あなたが本気で取り組まなかった。問題だったのは理論ではなく、あなた自身の向き合い方だった。これは理論に対する反論ではない。

4. その理論は、あなたがまだ持っていない実践的知恵や人格を前提としている。理論そのものは完全に正しいかもしれないが、それを生きるには、知覚・判断・徳ある習慣といった能力が必要になる。そして、それらは一日で身につくものではない。うまく実践できなかったという事実は、その理論が間違っている証拠にはならない。

良い振り返りは、これらのうち実際に何が起きていたのかを真剣に検討するものであり、「難しかったからこの理論はもっともらしくない」という形で単純化してしまうものではない。

よくある失敗例

- パフォーマンス化。その日を、理論を劇的に演じるための舞台として扱ってしまい、誠実な道徳的実験として扱わないこと。この課題の観客はクラスではなく、あなた自身である。
- 人為的に作られたジレンマ。課題を哲学的に面白くするために、その日のうちに状況を人工的に作り出したり操作したりすること。これは課題の趣旨を損なう。重要なのは、本来なら過ごしていたはずの日常の中に含まれる道徳的な側面と向き合うことであり、哲学的に面白い逸話を生み出すために一日を演出することではない。

もしその日がほとんど平凡な一日だったなら、興味深い問いは、その理論が平凡な日常について何を語るのかである。

- 都合のよい部分だけを選ぶこと。理論がよく見える（あるいは悪く見える）判断だけを報告し、それ以外を省略してしまうこと。
- 最初から持っていた理論観に都合よく沿った結論。理論についての振り返りが、課題を始める前から持っていた見方と不自然なほど一致しているなら、どこかで何かうまくいっていない。この課題は、あなたの理論観を動かすはずである。大きくではないかもしれないし、わかりやすい方向ではないかもしれない。しかし、何らかの形で動かさなければならない。もし何も変わっていないなら、あなたは本当にはその理論を生きていなかった可能性が高い。
- 抽象的な振り返り。理論を実際に使ってみた経験ではなく、理論そのものについてだけ考察してしまうこと。この課題は、理論批判を書くことを求めているのではない。理論を実際に生きようとしてみて、何がわかったのかを報告することを求めているのである。